

シニアのための資本論

1. 甦る資本論

一昨年、つまり2017年は「資本論」発刊150年で、その当時は専門家以外からも多くの関心呼びました。世界的金融危機や、日本経済が閉塞感に直面していたことも関係があったと考えます。

2. 80の手習い

世間の影響を受け、昨年2月私は「資本論」講座に参加する決意をしました。一年かけて4人の大学の現役教師または元教師による講義がありました。一回が4時間でそれが10回続きました。計算上は40時間に及ぶ長丁場でした。参加料の35,000円は少々高価だと思いましたが自分に対する投資と考え申し込みを決断しました。

3. 経済学は「マル経」

実は私の大学での専攻は経済学部なので学生時代は所謂「マル経」（マルクス経済学の略）の講義を多く履修しました。「近経」（近代経済学）も履修しましたが、それは会計学、簿記、原価計算、人事管理など経営学の履修と同列で、圧倒的にマル経の講座が多くを占めていました。他の大学も大同小異であったと推察します。

4. 資本論は大著

資本論の目次は別紙の資料の通りですが、これを見ただけでは内容を想像することはなかなか難しいことです。この目次によれば「資本論」は全3巻の大著です。しかしこの度受講した講座の対象となったのはその中のマルクス自身が出版した1巻だけですので、未了の部分が多く残っています。2巻と3巻はマルクスのメモを彼の没後友人のエンゲルスが「想像もまじえ」編集しました。商品流通、利潤、金融などはこの中に含まれています。

5. 新自由主義との対決

最近「新自由主義」の呼び声のもとに資本主義は規制緩和を推進し、個々人の創意工夫により新しい経済が展開すると考えられています。その陰で派遣労働、ブラック企業などの新語が流布されています。そのようにこのところ、従業員の権利が剥奪され、マルクスが取材した150年前のロンドン労働環境を再現しているともいわれています。

6. 産業革命の歴史と資本主義

- ①第一次産業革命 蒸気機関⇒紡織機、汽車・汽船
- ②第二次産業革命 内燃機関、電力⇒自動車、航空機
- ③第三次産業革命 原子力、IT⇒コンピュータ、モバイル通信
- ④第四次産業革命 IOT、AI⇒ロボット・アンドロイド

令和元年6月27日 丑寅エイト資料 作成者：石川勝之助

「資本論」 副題:「経済学批判」 目次の要約

第1部 資本の生産過程 (発刊:1867年)

- 第1篇 商品と貨幣
- 第2篇 貨幣の資本への転化
- 第3篇 絶対的剰余価値の生産
- 第4篇 相対的剰余価値の生産
- 第5篇 絶対的および相対的剰余価値の生産
- 第6篇 労賃
- 第7篇 資本の蓄積過程

第2部 資本の流過程 (発刊:1885年)

- 第1篇 資本の諸変態とそれらの循環
- 第2篇 資本の回転
- 第3篇 社会的総資本の再生産と流通

第3部 資本主義的生産の総過程 (発刊:1894年)

- 第1篇 剰余価値の利潤への転化、および剰余価値率の利潤率への転化
- 第2篇 利潤の平均利潤への転化
- 第3篇 利潤率の傾向的低下の法則
- 第4篇 商品資本及び貨幣資本の商品取引資本および貨幣取引資本への(商人資本への)転化
- 第5篇 利子と企業者利得とへの利潤の分裂。利子生み資本
- 第6篇 超過利潤の地代への転化
- 第7篇 諸収入とその源泉

続編「剰余価値学説史」:「資本論 第4部」となる予定であったがこの標題となった

令和元年6月27日 丑寅エイト資料 作成者:石川勝之助

(新日本出版社版 叢書より転写)

「資本論」 重要用語

1. 使用価値と交換価値

商品は、人間の欲望をみだす使用価値（近代経済学では効用）と他のものとの交換比率であらわされる交換価値（価格）を兼ねる。商品の価値は、その商品の生産に費やされる社会的に平均的な労働量によって決まる。マルクスが、アダム・スミスやリカードから受け継ぎ発展させた労働価値説。

2. 貨幣と価格

商品の価値量は使用価値量によって表現されるが、これが貨幣の起源である。商品の価値量を表現することが社会的合意となった場合、その特殊な商品が貨幣となる。貨幣商品の代表が金(gold)であり、すなわち重量が貨幣の単位となった。商品の価値を貨幣で表現したものが価格である。ある商品の価格は需要供給の変動により、価値と離れて変動するが、価値はこの価格変動の重心に存在し、長期的平均的には、商品が含む労働量によって、価格は規定される。

3. 貨幣の資本への転化、剰余価値の生産

資本はどのようにして価値増殖し利益を得るのか。自ら価値を生産する特殊な商品すなわち労働力商品を所有する、賃金労働者からの搾取によってである。

機械などの生産手段や貨幣がそのまま資本になるのではない。ある条件の下で「資本」に転化する。その決定的な条件とは、生産手段を所有するブルジョアジー（資本家階級＝生産手段の所有者）と、賃金労働者の存在である。

4. 絶対的剰余価値生産と相対的剰余価値生産

第一は、労働力の価値、労働時間を延長。しかし、まず1日は24時間しかない。さらに賃金労働者は労働時間の短縮を求めて労働組合を組織して資本家に抵抗する。長時間過密労働は絶対的剰余価値生産の概念。

第二は、労働時間が一定ならば労働力の価値（または賃金）を削減。生産力の上昇によって可能となる。この競争が諸資本を強制し、個々の商品を安くさせ、生活費を安くさせ、賃金を引き下げる前提を生み出す。非正社員の低賃金は相対的剰余価値生産の概念。（注）生産力を上昇には分業に基づく協業、機械制大工業など

5. 労働力の価格

資本（その人格化としての資本家）は、労働者から労働力商品を購入する。労働者はその対価として、賃金を受け取る。労働力商品の価値はその再生産のために必要な費用、すなわち労働者と家族の生活費によって決まる。労働力商品の使用価値は、労働して価値を生み出すこと、しかも資本家にとっての使用価値は、賃金を超える価値を生み出すことである。賃金を超えて労働者が生み出した価値が「剰余価値」であり、資本家がこれを取得する。これがマルクスが明らかにした搾取（労働者が生み出した価値－賃金＝剰余価値）の秘密。剰余価値とは不払労働のこと。



カール・マルクス生誕 200 年

昨年は 19 世紀の偉大な哲学者、経済学者カール・マルクスの生誕 200 年として、世界各地で記念行事が行われた。このマルクスほど毀誉褒貶相半ばして、いまだに評価が定着していない大学者は少ないのではないか。電子マネーの時代とはいえまだまだ日常生活では貨幣は我々の生活に密着している。この貨幣を歴史的に考察し、理論的に解明したのはマルクスである。彼の代表的著書「資本論」において商品について説き、労働価値説を導入して理論体系を確立した後、貨幣の機能を説明している。そのように易しいことをわざわざ難しく説明するところが大学者らしいところだと常々「感心」している。

彼は実際の生活面ではこの貨幣との付き合いは決して濃密ではなく、そのため奥方には最大級の苦勞をかけたようだ。ちなみにこの奥方はドイツ・ウエストファリア（30 年戦争終結条約の地）の貴族出身の「御嬢さん」で若くしてマルクスと相思相愛となったイエンニーと称する気丈な主婦でもあった。

この金儲けに疎いマルクスを裏で支援したのが友人のエンゲルスである。エンゲルは実はいわゆるブルジョワジーの御曹司で、父親は工場経営の資産家であった。エンゲルスはこの父親から報酬と称しての不労所得を得て、つまり自分自身はパラサイトにもかかわらず、収入の一部をマルクス一家の生活支援に充当していた。少し考えると複雑な関係が浮き上がる。つまり、彼が舌鋒鋭く批判していたブルジョワジーのカネがブルジョワジー体制崩壊の理論的指導者に渡っていたことになる。これこそ社会の矛盾だと浅学菲才の凡人には思えるのだが。

ディケンズの小説に登場するロンドンの貧民窟の跡を探索したことがある。古いレンガ造りで今にも崩れそうな長屋が細い道路の両脇に並び、オリバー・トゥイストが襤褸（ボロ）をまとうて飛び出してきそう雰囲気であった。マルクスはこの場所で底辺に住む市民の生活をつぶさに観察、取材したと伝えられている。現在は使用されていないが煤（スス）がしみ込んだ煙突には 150 年の歴史を感じた。

マルクスは文明、技術（例を挙げるなら機械・電気・化学技術の導入により、船舶・鉄道、電信体制が確立）が社会体制・意識を決定すると述べているが、これは現在でも真実である。その後登場する電子工学、航空機、原子力などはまだ予見されていなかった。この論法は AI, IoT が近い将来の社会体制の変革させることを示唆している。

当時から存在したブラック企業をマルクスは論破した。それも未成年の児童の体が小さいことを利用して煙突掃除、炭鉱の洞穴で石炭運びなどに従事させたという。150 年の歳月を経て少しは改善されたかもしれないが、いまだに不払または長時間労働が全く消滅したわけではないのは心が痛む。

<ちょっと補足と休憩>

1. 弁証法的・史的唯物論

マルクスは「ヘーゲルの弁証法」を基礎とした「弁証法的・史的唯物論」を展開した。世の中の森羅万象は互いに影響を与えつつ、常に変化を続け、その変化に対応できないモノは脱落、破滅すると主張した。ダーウインの動物進化論と符合している。我が国の代表的古典である平家物語の「諸行無常」や方丈記の「澱みに浮かぶ泡沫」など冒頭部で「弁証法的」人生観を詠っているのは興味を覚える。

2. 産業革命

第一次産業革命は、18世紀半ばから19世紀にかけて勃興した一連の産業の変革と、それに伴う社会構造の変革である。産業革命において特に重要な変革とみなされるものには、織物の生産過程における様々な技術革新、製鉄業の成長、そしてなによりも蒸気機関の開発による動力源の刷新が挙げられる。これによって工場制機械工業が成立し、また蒸気機関の交通機関への応用によって蒸気船や鉄道が発明されたことにより交通革命が起こった。しかし同時にこれらの文明の利器は自然環境を破壊したことを忘れてはならない。

3. 人間の認識

マルクスは物質が本来的で、根源的な存在であり、人間の意識は身体（例えば大脳、小脳、延髄など）の活動から生まれるのだと主張した。従って観念的な従来の宗教は群衆を陥れる麻薬だと断定した。その規範に基づきマルキシズムを導入した旧ソ連では無宗教を国是として、伝統ある寺院を次々と破壊した。その後新生ロシアではそれら寺院の復旧がなされている。

4. 資本論の値段は？

第1部の初版版（ドイツ語）は1000冊出版され、約300冊は売れ残った。そのうちマルクスの署名入り版は世界で15冊確認されている。日本には少なくとも4冊あると伝えられている（東北大学、小樽商科大学、法政大学、関西大学に各1冊所蔵）

5. ここがロドスだ、ここで跳べ

資本論は資本の論理を展開するのみならず、歴史、文学、哲学、そして寓話までも引用されている。あの若者に人気のAKB48が舞台上で披露した「ここがロドスだ、ここで跳べ」も出てくる。これは自慢を戒める「イソップ寓話」の小断。ある競技者が地元へ帰り、競技会での自分の活躍を自慢した。それを聞いた住民が「ここで再現してくれ」と申し出たところ「ここではできない」と断った。当時は新聞、TVなどマスメディアがなかったので話だけでは真偽の程がわからない。